

第5講：71 「あの雨の中を」

1. はじめに

この逸話は、教祖にお目通りいただき、不思議なご守護を頂いた井筒梅治郎の信仰の元一日を記したものである。教祖伝、天理教史のなかでは、井筒梅治郎といえば芦津の初代、「お手の真明講」、かんろだいの石出しふしん、水のさづけ、遠隔地布教の先駆、といったさまざまなエピソードで登場するが、今回はこの逸話を、むしろ今日的な信仰・布教という問題意識から捉えてみた。

2. 教祖の現前性／身体性と包摂性

講演では、この逸話のうち、「早速、教祖にお目通りさせて頂くと」という文言から教祖の「現前性」について、「たねの頭を撫でて下さった」という描写から教祖の「身体性」について、また「あの雨の中を、よう来なさった」というお言葉から教祖の「包摂性」について、それぞれ照射した。教祖の現前性と身体性は、教祖御在世当時の先人には可能であったものの、今日の私たちにはもはや不可能なものである。一方、包摂性については、私たちようぼくによって今なお具現化可能なものである。包摂性の具現化を通して、私たちが教祖の現前性・身体性を喚起する、あるいは“映していく”こと一少なくともそれを理想とすること一は、ようぼくとしてひながたを通ることの理想としてあり得るのではないだろうか。

3. 真明組からみる井筒梅治郎の信仰

「梅治郎の信仰は、この、教祖にお目にかかった感激とふしぎなたすけから、激しく燃え上がり、ただ^{ひとすべ}一条に、にをいかけ・おたすけへと進んでいった」と語られる、梅治郎の信仰の揺ぎなさとしなやかさは、「本田寄所」に集ういわば“商人的”人間関係を核とする信仰共同体のなかで醸成されていった。真明組は明心組（後の船場大教会）と共に、都会で名称の理を受けた最初の講である。天理教伝道史では、大阪（河内・摂津）と大和との比較において、大和が農業中心で保守的であるのに対し、大阪は商業中心で進歩的であると言われる。「本教がまだ大和だけの時分の信仰はじっくりとしていた。それが一度河内大阪へ流れ込むと、倒れていた草木が一ぺんに立ち上がり、生き生きと動き出したという感じがする」（高野友治『御存命の頃』、286）という描写は、梅治郎と真明組における信仰の躍動感をよく伝えている。

特にその布教の躍進を支えたのは、徹底したおてふりの実践であった。真明組が「お手の講社」と呼ばれる^{ゆえん}所以である。この点について、高野友治は次のように述べている。

当時本田の寄所には三十人、五十人と信者が参拝し、太鼓をたたいておつとめを行い、おてふりを踊った。あまり皆が熱心で暁が三ヶ月に一ぺんづつ表替えをしなければならぬほどすりへってしまった。それからまた夜おそくまでどんちゃんやるので、近所の人々が安眠妨害だと怒り出し、やむなく国津橋の橋の上へ出て、夜明けまでをてふりの稽古をしておったという。（高野友治『天理教傳道史I』、83）

これほどまでの集団としての信仰の盛り上がりは、当時の大和ではお屋敷を除いては見られない。これは、商人としての人間関係・信頼関係がそのベースにあったからこそ可能になったのでは

ないか、というのが本発表の論点である。つまりそれは、真明組におけるこうした白熱の信仰の展開は、ある種の人間関係における信頼によって支えられていたのではないか、という見方である。この関係性をより強固なものにしたのが、“共におどる”というおてふりの徹底した実践であったように思われる。

4. “商人的”人間関係とおたすけ

“商人的”人間関係とおたすけについて、次のような記録がある。

当時おたすけ人といっても、皆それぞれ商売をし、仕事をもっている一家の主が多かった。いうまでもなく井筒講元の家は萬綿商であり、中川講脇の家は紺屋であり、その他……藍に関係した商人が多く、商売屋の主人であった。それがおたすけに歩き廻っていて、時には突然一日も二日も三日も家を空けて帰って来ない。留守の者は困ってしまい、尋ねてみると、どこそこの病人のおたすけに行っているという。早く帰ってくるように使いを出すと、

「今、人一人たすかるか、たすからぬかの瀬戸際だ。商売などあと廻しや。」

と追い返すのが常であった。（『真明芦津の道 復刻版』、90）

だが、そもそも、利益を最大目的とする商売と、利益を度外視するおたすけは、常識的に考えればまったく対照的な行動原理によって支えられているものである。この矛盾するように見える両者を繋いだものとは何だったのだろうか。

その鍵は、「165 高う買うて」の逸話に探ることが出来る。この逸話では、真明組から入信した宮田善蔵が、お屋敷で教祖から頂いた、「商売人はなあ、高う買うて、安う売るのがやで。」というお言葉の意味についての、梅治郎のさとり方が肝となっている。梅治郎は、「神様の仰っしゃるのは、他よりも高う仕入れて問屋を喜ばせ、安う売って顧客を喜ばせ、自分は薄口銭に満足して通るのが商売の道や、と、論されたのや」と善蔵を論している。このさとりは、商売の道理と人だすけの道理は矛盾しないというものである。ここでは、商人としての信頼関係と、信仰的な信頼関係が一つのものとして捉えられている。梅治郎の信仰的情熱は、教祖から与えられたこうしたさとりによって支えられていたように思われる。

5. おわりに

井筒梅治郎の信仰は、教祖の現前性／身体性および包摂性によって可能となったいわば“絶対的信頼”に基づくものであったと言える。また、梅治郎と真明組の人々との信頼関係のあり方は、彼らの信仰の持続を可能にするものであった。

梅治郎をおたすけへと駆り立てた教祖の現前性／身体性を、今日私たちが体験することは不可能である。だが、今日における信仰のあり方として、一商人に非ずとも一より豊かな信頼関係の醸成を通して、信仰を共有していくことは可能であろう。ひいてはそれは、私たち自身が包摂性を具現化していくことによって、教祖の現前性／身体性を“映す”、あるいは“喚起すること”に繋がるのではないだろうか。それは、今日私たちが、ようぼくとしてひながたを通ることの意義であるように思われる。